

第 5 回北九州市地域コミュニティビジョン検討会議・発言要旨

1 開催日時 令和 8 年 1 月 19 日(月) 18:30~20:00

2 開催場所 プレゼンルーム(本庁舎 5 階)

3 議題

(1)事務局説明

・これまでの振り返りと本日の議題

(2)意見交換

4 今後の予定

5 出席者氏名

〔構成員〕(順不同・敬称略)

多田 政博(欠席)	若松区自治総連合会会长
日高 徹	西小倉校区まちづくり協議会会长
太田 康子	北九州市婦人会連絡協議会事務局長
古賀 由布子	Say!輪(セイリング)代表
西村 健司	一般社団法人 コミュニティシンクタンク北九州代表理事
勢一 智子(欠席)	西南学院大学法学部教授
松永 裕己	北九州市立大学大学院マネジメント研究科教授
大熊 充	うきはの宝株式会社代表取締役
古賀 えみ子	一般社団法人北九州シニア応援団代表理事
中村 真理子	元市民センター館長
斎藤 磨希	乙世代課パートナーズ

〔北九州市〕

事務局以外に武内市長、江口副市長も出席

6 議題(1)事務局説明要旨

<「これまでの振り返りと本日の議題等について」の説明>

- 第5回をもって検討会議は一つの区切りとさせていただき、これまでいただいたご意見をもとにビジョンの素案をまとめてまいりたい。会議というかたちではないが、構成員のみなさまに素案へのご意見を伺いたいと考えている。
- 第4回では、地域コミュニティの将来像に必要な3つのポイント「『楽しさ』や『興味』から『やりがい』へ」、「地域課題の解決に多様な主体の力を集結」、「地域活動に必要な資源が循環する仕組み」を提示し、ご議論いただき、みなさまにご賛同いただいた。
- その際に「若い世代に地域活動に参加いただくためには、子ども・学校を核とした地域づくりが非常に大事」、「子育て世代も隙間時間を活用してアイデア発信したり、活動に共感した人が資金を支援したりする仕組みが重要」「これからはデジタルが重要で、若い人を取り込むこと、活動のスリム化に有効」「シニアの方々がデジタルという新たな力を身につけ、発揮して、みんなで助け合って行くことが重要」「地域コミュニティにおける『安全安心』についてもう一度整理したほうがよい」といったご意見をいただいた。
- 「地域コミュニティにおける『安全安心』」については、第3回で、コミュニティの役割に関して整理した図をもとに、例えば、防犯・防災・見守り・ゴミステーションの掃除等の衛生管理といった地域活動が人の幸せ、ウェルビーイングを支える生命・身体・健康の維持に近い機能として、安全安心のために大事であることを確認し合い、ご賛同いただいた。
- 加えて、住民ニーズという側面から考えると、地域活動に関するアンケートの「地域活動のなかで得たいものは何か」という質問で回答の上位に「地域全体の安心感、愛着」「安全性や防災対策」「地域住民との交流、居場所」があり、実際に地域でなされている活動で例えば、祭りのような交流イベント、サードプレイスと呼ばれるような誰もが居心地がいい居場所づくりといった取り組みもコミュニティに求められる安全安心であろうと確認し合い、ご賛同いただいた。地域により活動はさまざまであるが、「地域で必要とされる活動が継続してなされることがコミュニティにおける安全安心の核」と捉えられるのではないかと改めて整理した。
- 以上、これまでの議論をふまえ、本日第5回は、前回確認させていただいた3つのポイントを実現していくためには具体的にどういった取り組みが必要なのか、その方向性についてご議論いただきたい。

<「取り組みの方向性について」の説明>

- 本日ご議論いただくために、これまでのご意見をもとに、取り組みの方向性について5つの視点とアイデアを整理させていただいた。案についてはあくまでも将来像の実現という視点で検討しているため、現実の時間軸にはさまざまなもののが含まれていることをお含みいただきたい。

- 1点目は「デジタル技術の活用」についてである。これは、「デジタルが重要。若い人を取り込む、活動のスリム化にも効く」「会議は Web、情報は LINE で十分という事例もある」「デジタルは人と人を結び、つながりを育てるツール」「シニアや大学生がデジタルを教える側になれる。助け合いになる」「デジタルで感謝を伝えやすくする仕組みがあれば、やりがいにつながる」と言ったご意見にもとづいている。取り組みアイデアとして、例えば、アプリによる情報共有・連絡調整・決済、オンライン会議の開催、行政手続きのオンライン化、シニアのデジタル人材の育成など、参加しやすいコミュニティに向けたデジタル環境の整備をあげている。
- 2点目の視点は「地域の拠点や居場所の確保」について。「市民センターで楽しみながらアイデアを形にできるとよい」「市民センターのルールは、もっと簡素で柔軟でもいい」「市民センターは多世代・多様な人が交わる場として使える」「学校は、子どもだけでなく地域の接点になり得る」「居場所があること自体が安心感につながる」といったご意見にもとづき、拠点となる施設の重要性やさまざまな施設の配置状況をふまえて「地域のコミュニティ拠点施設の整理・確保・多機能化」といった取り組みアイデアをあげた。また、第1回のゲストスピーカーの株式会社 KITABA 酒本宏 代表取締役からさまざまご提言をいただいた中に「いろいろな人が集いやすいサードプレイス」についての話があった。さまざまな場所で、さまざまな形でサードプレイスがあれば、多様な人のつながりの入り口になるのではないかと考え、「多世代が集う『サードプレイス』機能の充実」もアイデアとしてあげている。
- 3点目の視点は「地域の連携・協働機能の強化」である。「子どもを地域で育てる視点」「学校を核に PTA、地域、OB、先生、企業などが関わる形」「テーマがあれば若い人は関心を持つ。自治会という枠にこだわらなくてよい」「自治会だけで全部を担うのは限界。NPO や企業、大学とも役割分担が必要」「若い世代に企画を任せると、同世代が集まりやすい」といったご意見にもとづき、「地域と、大学や NPO・企業等をつなぐプラットフォームの整備」がなされれば、協働や連携をよりおこないやすいと考える。また検討会議でご提案いただいた「地域リーダーのスキルアップ・育成や地域運営の好事例の横展開、北九州メソッド」もあげさせていただいた。
- 4点目は「地域団体の目的や役割のスリム化・効率化」。「地域団体の目的や取り組みが多くすぎて、かえって活動が伝わらない」「行政からの依頼業務が多く、負担になっている」「行政が地域に仕事を頼むなら、対価があってもよい」「地域が本来やりたいことに集中できる形にすべき」といったご意見をふまえ、取り組みアイデアとして、例えば、デジタル技術を活用した代替手段の確保、団体側にニーズがない動員や広報依頼の廃止、委員選出依頼の見直しなど、地域団体が担う行政機能の再整理・再構築が必要だと考えている。また、第2回に日高構成員から伺った西小倉校区の取り組みを例として、目的や設立経緯をふまえて地域の各団体の役割を調整したり、整理したりすることも重要だと受けとめてアイ

デアとしてあげている。

- 5点目は「地域型循環システムへチャレンジ」という視点である。「活動に共感した人が資金で応援できる仕組みがあつてよい」「補助金だけに頼らない地域活動を考えるべき」「人材、時間、情報、お金が地域の中で回る仕組みが必要」といったご意見をいただき、地域活動の持続性を高めていくためには、地域で資源が循環していくことが望ましいという視点から、取り組みのアイデアとして地域の特性や歴史、環境を生かした「地域で資源が循環するような自走型の仕組みづくりへのチャレンジ」をあげている。事例として、長行校区でおこなわれている「おさゆき こいのぼりリメイクプロジェクト」を紹介する。この校区では家庭で眠っているこいのぼりを寄贈いただき、4月に約600匹のこいのぼりを紫川に掲げる「紫川こいのぼり祭り」を開催。このこいのぼりのうち、風雨にさらされて傷んだこいのぼりを譲っていただき、バック等々にリメイクして販売し、収益金をこの祭の開催費用として寄与されるという循環型の地域活動に取り組んでいる。
- また、循環や持続のために、その基礎として重要なこと、すなわち『ありがとう』のメッセージが地域活動のやりがいやモチベーションにつながる」といったご意見をふまえ、日常的なコミュニケーションはもちろん、SNSの「いいね」などデジタルの力を使って感謝の気持ちを伝えるということもあり得ることから、「住民間のコミュニケーションの多様化、向上」という取り組みアイデアをあげている。
- 以上、3つのポイント、5つの視点、9つの取り組みアイデアは、それぞれが機能することで全体として好循環が生まれ「多様な主体による全世代参加型地域コミュニティ」へつながっていくことをを目指したく、そのイメージを図として示した。

<構成員からの「地域資源、循環とは何か」という質問を受けて>

- 地域資源は、いわゆる人、物、金という発想がある。人では、例えば、まちづくり協議会の会長さんの平均年齢は75歳だが、いかに次の世代に活動をつなげていくか。ただ一直線につなげるだけでなく、ずっと続いていくように繋げる発想をしっかりと持たなければならぬ。お金では、例えば現在、地域総括補助金や役所から垂直に流れる仕組みはあるが、地域に必要なお金が自分たちで確保できるような環境があるのか。いかに地域にとって必要なお金を自分たちで、どういうふうにぐるぐる回すかという発想も必要になる。物は、地域にいろいろな資源が眠っていると発想できる。地域に眠っているものをいかにして循環させるか、マネタイズできるか。シェアリングエコノミーという言葉が流行っているが、いかにシェアしてみんなで共有していくか、こういう観点も大事だと思っている。循環する仕組みについては、物事を幅広く考えていただければと思う。

7 議題(2)意見交換・構成員等発言要旨(順不同)

日高徹 構成員

- これまでの議論の内容を事務局がまとめてくださり、本当に素晴らしい内容になっている。その中で 1 点、「地域活動に必要な資源が循環する仕組み」の「資源」と「循環する仕組み」とは、具体的にどのようなことをイメージしているのか、大事なことだと思うため伺いたい。
- 若い人にルールを作ってもらうことが必要という意見が出た。私もそのとおりであり、今後のことを考えると非常に大事なことだと思うが、これを具体的にどう進めていくのか、今後の進め方が本日の議題として非常に重要であり、難しいことだと感じている。
- リーダーの方の育成と今回策定するビジョン・考え方をそれぞれの町内会を含め、いろいろなところでみなさんに考えていただく仕掛けをどうやって作っていくかが非常に大事だ。
- 地域の中には、若い PTA の方々が動員要員のように扱われ、地域とあまり関わりたがらない。地域や若い PTA の方々と地域がうまくいっていないところもある。いろいろな地域がある中で、「変わっていこう」という考え方をみなさんどのように理解していただくのか、ビジョンを各地域にどのように落とし込んでいくのかが非常に重要であり、これが令和 8 年度以降の課題だと思う。
- 変えていくことは簡単にはいかず、時間もかかるだろうが、だからこそ、まず、2040 年に向けて、みなさんに考えていただく機会を作っていただくことが大事であり、一つでも二つでも理解いただいて実際に動き出したところがあれば、他の校区の参考にもなる。大事なのは「これからどう進めていくか」だと思う。
- 例えば、各区自治連合会やまちづくり協議会などの集まりで地域コミュニティビジョンの説明を行い、松永先生にコーディネーターになっていただいて、地域から会長さんだけでなく何名か出ていただき、パネルディスカッション的に議論する機会を作ってはどうだろうか。そこで議論を校区なりに持って帰っていただくことで、各校区での議論も進むのではないかだろうか。
- 社会福祉協議会ではリーダー研修が頻繁におこなわれているが、地域リーダーに対する勉強会は、自治連合会やまちづくり協議会を含め、現状ではありませんなく、必要だと思う。小倉北区では約 4 年前から新しく町内会長になった方々に、町内会とはどういう活動なのかを含めて年度始めに勉強会を始めた。研修を通じてやりがいを感じている方もいる。

太田康子 構成員

- 紙媒体からデジタルへということは十分わかるが、そこまで行きつけない高齢者の第一歩として二次元バーコードを提案したい。年に 2 回各戸配布される市民センターの『センターだより』には二次元バーコードが掲載され、アクセスすると市民センターで毎月おこなわれ

ていることがわかり、「面白そだから行ってみよう」と、地域活動に参加するきっかけになるのでは。八幡西区役所では二次元バーコードをカードに印刷して配っていて、私は常に財布に入れている。スマホが普及している現在、この二次元バーコードを地域活動参加のきっかけづくりに活用してはどうだろうか。さらに、二次元バーコードにアクセスした先で感想を投稿し、共有できるような仕組みがあれば、地域の行事他の誘導にもつながるのではないかだろうか。

- まちづくり協議会が実施している地域の祭りを変えた事例を紹介する。ある校区の社会福祉協議会の会長さんが、祭りの内容を変えてほしい若い世代が増えてきていることをまちづくり協議会に伝えたところ、「だったら社協さんで主催してください」と言われた。そこで、子どもを中心とした祭りを開催したところ、保護者の方々が参加し、中学生が「自分たちで作ったものを売りたい」と申し出、子どもや親子をはじめ、地域の人たちも祭りの仲間になって楽しみ、大盛況だったと聞いた。最初は「あなたのところでやって」と言っていたまちづくり協議会の人も最後は加勢をしてくれたそうだ。主催した会長さんはこの経験で「やっぱり話し合いが大切」だと言われていた。
- 私たちは地域の文化祭で、終活で出てきたアクセサリーを販売し、売り上げはこども食堂で活用するという、循環の取り組みをすでにおこなっている。
- 若い世代を含め、地域には、まちづくり協議会に参画したい人はいる。しかし、現状はなかなか参画できる環境になっていない。世代や人の入れ替えは必要で、硬直した組織に風穴を開けなければならない。そのために、例えば、まちづくり協議会に、若い世代や参画したい人、外部からの意見を入れられる枠を設定することが必要なのではないだろうか。若い世代、大学生、高校生、中学生と、いろいろな方が参画して、言いたい意見を伝え、その実現をまわりがフォローしてあげればよいのではないだろうか。
- 約 30 年前、まちづくり協議会や市民センターができるにあたり、「婦人会を作ってください」と提案して作っていただいた。男性ばかりの中に、女性は婦人会が 1 名参加しているような状態だった。女性の参加枠を増やしてと要求してもなかなか増えない時代に、私たちは壁を破っていこうと努力してきた。そして今、次の世代の時代になってきているのだろう。ルールメイクを若い人にさせるという意見を聞いて、私たちは若い世代を見守り、支えていく世代になったのだと感じた。
- 大学生から依頼を受けて婦人会の活動について話したことがある。活動内容については「自分たちもできる」と賛同してくれたが、男子学生は婦人会という名前に引っかかっていた。女子学生は「婦人会は必要、続けたらいいじゃないですか」と理解してくれた。
- リーダー研修について、市はいろいろとおこなっている。しかし、現状は活用されていないのではないだろうか。研修に参加し、学んでも、まちづくり協議会に参加の枠がないために参加できていないという状況もあると思う。

- 地域活動のリーダーは、いろいろな知識を広く持ち、まとめたり、つないだりする役目があるのではないだろうか。私自身はリーダーになることが好きだ。その理由は、自分がしたいことに向かって最短距離で進めるから。そのためには、みなさんの意見をしっかり聞いたうえで自分の考えを述べ、理解いただきながら進めることができが大事だ。「あなたの言うことに賛成だから一緒にやろう」と言っていただけるリーダーでなければ。自分勝手に進める人はリーダーとしての資格はないと思う。

古賀由布子 構成員

- NPO や市民団体に関わると、思いを持って地域をよくしようと活動している若い人が多いことがわかる。そういう人たちが地域とつながり、活動して、成功している事例もある。一方で、思いを持った若い人たちが地域に提案してもはねられて実現できないケースもよく見る。
- まちづくり協議会などに参画できる枠を増やすという話があったが、枠を増やすというより、本当に協働するつもりで、どんどん手を組んでやっていくことが、新しい入れ替えになる。思いを持った若い人たちが新しい風になって土を耕すことになるのが一番よいと思う。
- 本当に考えている、面白い活動をしている NPO や若い人、学生さんたちはたくさんいる。そういう人たちや活動についてぜひ知っていただき、どんどん取り込んでいただきたい。
- デジタルについて、高齢者の DX 化を図るという話があるが、それと並行して、これからを担う 40 代、50 代の人たちの、地域活動に参加するハードルを下げるデジタルの使い方を発掘すべきであり、ハードルを下げる取り組み、モデルケースを示して行ってみてはどうだろうか。例えば、参加の障害やわずらわしさを解消し、町内会活動を絞り込んで、連絡はチャットアプリを活用するといったハードルの下げ方は、最低限できるのではないかと思う。
- 私の町内では実際に目的を 2 つ、ゴミステーションの掃除と街灯のための積立に絞り、連絡はチャットアプリを活用。参加のハードルが下がり、成功している。みんな地域活動をしているという認識はまったくないと思うが、付随して、ゴミ出しのときに「きつそうだけど大丈夫？」と気遣い合ったり、子どもを抱えていたら「大きくなったね」と声をかけたりするなど、住民同士のコミュニケーションが自然発的に生まれている。人にはそういう気質があるので、そこは信じて、目的の絞り込みとデジタルの活用という方法があつてもよいのではないかと思う。
- リーダーについて、私は PTA の会長にしても、地域リーダーにしても、リーダーになることがとても負担になる。理由は二つの恐怖があるから。一つは負担をかけられるという恐怖。もう一つは、リーダーを引き受けた後にハシゴを外されるのではないかという恐怖だ。同じ世代の人たちはリーダーになることをイヤがる人も多いのではないかと思う。働き盛りの

人たちで勇気を持って自ら「リーダーをやる！」という人は、少ないようだ。

- リーダー像はよくわからないが、大事なことはリーダーを一人にしない環境だと思う。リーダーを支えるまわりの力が必要だ。リーダーが一人で参加する研修ではなく、フォロワーも一緒に参加できるほうがよい。リーダーのスキルアップより、フォロワーのスキルアップが大事かもしれない。

西村健司 構成員

- 地域の団体に若い人が参画できる枠を作るという話だが、これまでに地域に入った経験から、枠はなかなか作りにくいと思う。枠がなくてうまくやっているところは、既存の役員さんたちをうまく立てたり、活動している人たちにモチベーションを与えたりしながら、「やっぱりもう少し仲間が必要だよね」といった感じに持つていてうまくやっている。
- 「ありがとうございますモチベーションになる」とあったが、そういったことも含め、既存の人たちを大事にしながら、新しい人が入れるような仕組みをいかに作っていくか。最終的には人と人であり、そのあたりをどううまく作るかがポイントだと感じた。
- 地域には何かやってみたい人はいる。しかし、既存の重鎮たちがいてやりたいことができない。重鎮たちを立てながら、自分たちでやりたいことをうまくやれるように少しづつこじ開けていくことをやっていかないと。今、活動している人たち、役員だけでなく、いろいろなことをされているボランティアさんにも感謝し、その人たちを立てながら、新しいことにチャレンジしていくような環境をいかに作っていくかが大事だと思う。
- 面白い発想を持っている人や調整が上手な人が地域にはいて、そういう人がキーマンとなって、内部調整し、新しい人が入り込める環境を作ってくれる。そうやって、何かやりたいというモチベーションの高い方々が入れる体制がマッチしたときに、物事が動き出すようだ。
- デジタルの話が出たが、新しい発想や若い方々の「こんなことしたい」を実現化するために、地域の活動に入りやすい仕組みをいろいろなツールを使って作れるとよいと思う。「チャレンジしてみよう」と思える仕組みができ、「やってみたらすごくよかったね」といった状況が生まれると、それがまた次につながっていく。
- ルールについて、若い世代しか作れないルールもある。例えば、ルールがないままチャットアプリを使った防災訓練を行い、一斉に情報が流れてなかなかうまくいかなかった経験がある。チャットアプリの投稿の仕方、「こういう発言を長々と書くと若い人は読まない」といったこともある。そういうことも含めて、ルール化するとよいのではなかろうか。
- 居場所の確保で、市民センターのルールについても、若い人の「こういうふうに使いたい」をルールに入れ込んでいくと、若い人が地域に溶け込んでいくきっかけになると思う。

大熊充 構成員

- これまでの会議での話をまとめてくださり、さらに理解が上がった。
- おじいちゃん、おばあちゃんがデジタル化することによって若者とつながるということは必須で必要だが、これが日本中でなかなか進まない理由は、おじいちゃん、おばあちゃんがデジタルで何がわからないのかを若者たちを含めて、デジタル化を進める人たちがわかっていないからだ。おじいちゃん、おばあちゃんを DX 化するには、それがわかるおじいちゃん、おばあちゃんたちに動いてもらうのが一番よいと思っている。教えるおじいちゃん、おばあちゃんを育成して、DX なんとかと肩書きをつけてもよい。ボランティアでも報酬を得て活動してもよい。報酬を得る場合のルールを決めればよい。行政では音頭をとりにくいくかもしれないが、民間企業にとっても魅力ある取り組みだと思うので、制度設計をして、広めていくことが必要だと思う。
- 若い人に地域活動に参加してほしいと言いながら、ルールは先輩方が作るというのはナンセンスではないだろうか。一方で、自分たちがわからない新しいルールや仕組みについて先輩たちは「わからん」と若い人たちに押し付ける。そうではなく、これから地域づくりを考え、ルールメイキング自体に若い人に参画してほしい。しかし、これをそれぞれの地域に任せていては進まない場合が多いように思う。「これからの方がルールメイクしていく」というルールをビジョン実現に向けて、全体の方向性として決めたほうがよいと思う。そのようなルールを意識的に設定しなければ「多世代が入る」ということの実現も難しいのではないだろうか。
- 若い人にルールメイキングしてもらうことは、若い人が言ったことがすべて叶うということでも、先輩たちのルールを排除するということでもない。若い人の視点をきっかけにして、先輩方と若い人たちが対話をし、決めていけばよい。そうしなければ、現状は、若い人の意見は弾かれ、聞く耳さえもたれない場合も多いのではないだろうか。どうしても譲れないルールがある場合は、先輩たちがきちんと説明する。そうやってそれぞれの地域で決めていけば良いと思う。
- 行政からの依頼内容の見直しや合理化といったことも、それぞれの地域に任せるのでなく、全体として方向性を固め、「みんなで合理化しよう」という方向に持っていくかなければ、実現は難しい。
- 例えば、婦人会は素晴らしい活動だと思うが、名称を含めてアップデートされていない部分もあると思う。そのため若い人が入ってこないまま、会長やリーダーが体力的にきつくなつて全国的に活動終了している。本当にそれでよいのか。このままでは、変えたほうがよいことだけでなく、残すべき活動も衰退してしまうのではないか。若い人も、先輩方もお互いに聞く耳を持って、これからの人たちの話を取り入れ、残すべきことは残しながら、次を担う人たちがルールメイクし、アップデートしていくことが必要だ。

- 現状は、デジタル化を提案しても、それを嫌う先輩がいたら「即却下」となることは目に見えている。若い人が現状に対する事実だけを述べても、先輩に怒られて終わり……という場合も多い。必死に取り組んでこられた先輩方は素晴らしいと思うが、例えば、ハングリー精神や根性と若い人に言ってもパワハラになってしまう。若い人に権限を渡すことが必要であり、ルールメイクもデジタル化、合理化も、次の世代が入りやすい、行いやすい環境を意識的に、全体の方向性として組み込むのがビジョン実現には必要だと思う。
- おじいちゃん、おばあちゃんには必須でデジタルを使えるようになってもらったほうが良い。防災に役立つか、デジタルを使う喜び、楽しさ、利便性、それをきっかけに若い人たちとオフラインでつながる、コミュニケーションのきっかけにもなる。

古賀えみ子 構成員

- 地域活動が活発なところ、そうでもないところなどさまざまだが、例えば、地域の会議内容を常にAIに記憶させ、整理整頓してもらって、その地域にふさわしい活動をAIにコーディネートしてもらってはどうだろうか。そのような取り組みも必要だと思う。
- 人、時間、力、モノ、情報、つながりといった地域資源があるが、若い人は力の部分が得意かもしれないし、シニアにはゆったりした時間があるなど、世代によって得意分野がある。それぞれの世代の得意分野を役割として分担することもあると思う。
- インターネット上には地域密着で不要なものの販売や譲り合い、求人や手伝えることなどを書き込み、交換できる掲示板がある。地域でも年に1回、物々交換を行う場合もあるが、日常的に地域で使わなくなった物、譲れる物の情報をネットで流し、交流、交換できる地域のステーションみたいなものを作ってはどうだろうか。
- 今後、海外の人が増えてきたとき、北九州の文化や歴史をしっかりと伝えていくように、郷土の勉強も大切だと思う。
- 「全世代参加型地域コミュニティ」という骨太の方針があるが、これまでの話を聞いていると、「全世代型」はとても難しいことがわかる。組織は名称から生まれ、名称からルールが整っていく。例えば、婦人会や老人クラブという名称がある。老人という言葉は、今は死語だと思うが、組織になると壊せない。組織の怖さ、頑固さがある。そういうたった年代別の組織を一つにつなげてコミュニティを作るために、先輩たちから子どもたちへ、ボランティアの喜びを指導する必要があるのではないか。ボランティアの分野は幅広く、年代に合った活動がある。ボランティアをおこなうことで、「地域コミュニティの将来像に必要な3つのポイント」にある楽しさ、興味、やりがいが生まれる。ボランティアは世のため、人のため、そして自分のためもあり、その喜びやまちづくりについて、地域の先輩方が若い人に伝えていく、そういう指導がこれから先輩方ができることではないだろうか。どういうまちづくりをするのかを世代を超えて考えるボランティア組織が非常に大切であり、地域の力、

人の生きがいになり、互助精神を養う機会にもなる。互助精神を養うようなまちづくりをおこなっていくべきだと思う。

- デジタルは便利であるが、やはり多世代が混ざり合うのは顔をあわせることだと思う。よもやま話でもなんでもよい、褒め合うことでもよい、顔を合わせて話をすることが大切であり、空き家をコミュニティセンターとして活用したり、市民センターは例えば、宴会でも子ども食堂でも、なんでも使えるように、ルールをもっと柔軟にしたりして、人が集う場の整備や利便性の向上も考えるべきだと思う。昔は駆け込み寺があった。今は派出所も少なくなり、安心して駆け込める場所がない。コミュニティセンターや市民センターがそのような場になるとよいと思う。
- 地域リーダーはまとめ役だと思う。多くの人の意見を聞いて、それをどのような形にするのかをまとめられるような人だと思う。

中村真理子 構成員

- 人は歳を重ねると誰でも脳が弱るが、脳の代わりをスマホがしてくれ、スマホを第二の脳と捉える考え方があり、認知症対策の分野では、脳が萎縮してもスマホがなんとか生活を支えてくれるという話が広まりつつある。そういうことをアナウンスすれば、高齢者の方々の、「頑張ってスマホを勉強しよう」という意欲につながるよう思う。スマホをみんなが学ぶことはこれから先、大事になると思う。
- 先日、八幡東区でNPOの人や大学生1、2年生など15名くらいの集いがあり参加した。屋台骨は80代のおじいちゃん。NPOとしての理念はあるが、一人暮らしの人が一人でご飯を食べるのが寂しく、みんなで食べようと集まっている。会費は1,000円。夕方5時くらいからみんなが集ってきて、一緒に食事をする。確かにNPOとしての理念もあるが、理屈抜きでみんな楽しそうで、学生さんも「ここに来るのがめっちゃ楽しい」と言っていた。楽しいから始まるつながりづくりもとてもよい。「この地域の人がしあわせだったらいい」と言う人。高齢の理事長は「以前のように螢祭りが盛大になることが夢」だと言われていた。何がどうということではないが、とても幸せな時間を共有させていただき、古民家を使ったあのような集まりがいろいろなところであるとよいと思った。
- 地域の会議に参加する機会がある。当初はリーダーや会長だけが話している会議で、参加者にも話してもらうためにグループワークを取り入れ会議が進化した事例があった。また、例えば、行事についての話し合いで、会長さんやリーダーにとって耳が痛い話をどんどんしてもらい、その結果、行事がとてもスムーズに進んでいた事例も目にしてきた。リーダーに受けとめる気持ちがあると、ものごとがうまく進むと思った。

齊藤磨希 構成員

- 若者が地域活動に入りにくい理由の一つに、会議の時間が決まっていて、任期が長いことがあると思う。以前、市長が、会議はいつでも参加し、いつでも抜けられるというヨーロッパでの事例をお話しされていた。そのような場だと参加しやすいのではないだろうか。
- 地域団体の活動や会議を属人化させないことが大切だと思う。考え方や仕組みを平準化させるために、誰がいつ参加してもできる状態を作ることで若者は参加しやすくなるのではないかと思う。DXの推進はそのために役立ち、例えば、毎回の会議をAIを使って蓄積し、会議で議論すべきことをAIに提案してもらうこともあると思う。
- リーダーで大切なのは「やりたい」という気持ちではないだろうか。そのような人を募るのに広報を使うことやAIでできることもあると思っている。

松永裕己 座長

- デジタル化について、おじいちゃん、おばあちゃんたちのデジタルの困りごとの話は、当事者しかわからないことがあり、当事者視点をしっかりとどこかで入れないといけないことを示唆している。
- 事務局に整理していただいた9つの取り組みはそれぞれに絡み合い、相乗効果を生むことができると思う。
- 地域資源や循環が何かという問いはとても大事だ。つながりや関係も地域資源の一つ。本来は地域でつながりや関係が育まれ、継承されてきたが、それが今、途切れてしまっているから困っている。そのあたりをどう次の世代につないでいくのか。循環は横展開でぐるぐる回すことだけでなく、世代を超えて回していくことも含まれる。
- 地域によって特性や今までの取り組みの違いがある。町内の取り組みの目的を絞り、デジタルを使って効率化することが合う地域もあれば、既存の取り組みにデジタルを組み合わせたほうが進めやすい地域もある。
- 地域での物々交換の話が出たが、15年くらい前に企救丘で不要になった物を譲り合うビジネスを立ち上げた人がいた。それは、不要な物を地域で循環させるだけでなく、地域のいろいろな物語も循環させる事業だとその人は言っていた。
- シニアのみなさんが言うボランティアと若者が言うボランティアは異なる可能性がある。シニアの方々が「今まで地域のためにやってきた」ということが、若者から見るとあまり魅力的ではなく「それは必要ですか?」となる。若者は若者で、社会のため、人の役に立ちたいと活動していることもあり、シニアが思う「地域のため、世のため人のため」と若者が思うそれにミスマッチが生まれているのが現実ではないだろうか。地域で支えてきた伝統やいろいろな人の活動の本質は変わらなくても、やり方やスタイル、分野がおそらく違うのだろう。そこをどういうふうに繋いで、調整するのかが、今はちょうど端境期で問題が難しくな

っているようにも思う。

- 9つの打ち手にある「地域リーダーのスキルアップ育成」。この地域リーダーとはどういう人なのか、みなさんから、まとめ役、知識を広く持つてつなげる人、いろいろな意見を受けとめられる人、自分勝手に進める人はダメ、「やりたい」気持ちが大事などの意見をいただいた。また、リーダーを一人にしないことが大事であり、リーダーのスキルアップよりフォロワーのスキルアップが必要という意見もあった。確かにそうだと思う。「地域リーダーのスキルアップ育成」は「リーダーとフォロワーのスキルアップ育成」にしてはどうだろうか。
- 地域リーダーは、ぐいぐい引っ張っていく人もいるだろうが、これからはむしろ、住民同士で意見がぶつかったときにうまくつなぐ、地域とNPOとをつなぐ、コーディネートする力が重要になってくるように思う。地域リーダーに求められる能力みたいなものも、これまでとこれからの30年、50年では違ってくる気もする。それも次年度に考えてもらえば。
- 我々の役目はビジョンを組み立てるところ、そのための意見を出すまでであり、この会議は今回で終了する。3つのポイントと9つの打ち手を事務局に整理していただき、みなさんからもご意見をいただいた。これをビジョンとしてまとめ、アクションプランは次年度以降になるのだろう。3つのポイントと9つの打ち手はこの内容でよいだろうか。(全員賛同)ご賛同ありがとうございます。
- この検討会議で骨格ができたので、これに血肉をつけ、動けるようにしていくことが必要であり、ご意見にもあったように、次年度以降どうするのかが大事だ。
- 北九州市内でも地域条件が異なり、同じことをすべての地域で行うのは難しい。それぞれの地域特性に合ったコミュニティの姿ややり方を類型化できるかどうかわからないが、モデルみたいなものを作り横展開していくことも必要だと思う。「この校区でうまくいったから全部の校区でやろう」というのは、おそらくうまくいかない。そのあたりをふまえた具体的な一手が大切だと思う。
- リーダーとフォロワーの話もそうだが、最後に動かすのは人。育てるというのはおこがましいが、リーダーやフォロワーの育成を含め、これまでの地域の知恵や関係性を継承しながら、新しい形に変えていく。もちろん安全安心はどこも変わらず基本であり、そこはしっかりとやっていく。そのうえで新しい関係、今までとは違うやり方をやっていく、それが次年度以降に取り組むであろう9つの打ち手だと思っている。地域の属性を大事にしながら、取り組んでいくことが大切だと、われわれは考えている。

武内市長

- 最後に改めてご挨拶をさせていただく。地域を立て直すことは日本にとって、とても大事なテーマであり、連携中枢都市圏の18市町の首長会議でもそうだったが、日本中が自治会のことや扱い手不足などに悩んでいる。北九州から答えを一つ出したい、正面から向き合い

たいと考え、地域コミュニティビジョンの改革を立ち上げた。壮大なテーマであり、地域の再生をどこまでできるのか、最初は手探りの中で議論をスタートさせていただいたが、みなさんの知恵が集結され、北九州市から日本を救うような、地域コミュニティの改革の一歩が記せたのではないかと思う。

- みなさんには真摯で建設的に、リアルで率直な意見交換をしていただき、大変感謝している。地域でのご経験に加え、これからを見通したご意見ほか、世代を超えた議論をしていただいた。役割分担や新しいDXなど、さまざまな視点でいただいたご意見は本当に大きな力となった。これをコミュニティ改革のビジョンとしてまとめ、北九州の未来づくりはもちろん、北九州から全国へ一石を投じるチャレンジをしていきたい。みなさんからいただいたご意見をしっかり形として、一歩でも進めてどんどんアクションしながら次の時代のソリューション、解決策を出していきたいと思っている。みなさんには引き続き、いろいろな形でご指南いただければと思っている。地域コミュニティ改革、地域の立て直しはまだまだ長く続く。これからもぜひ、いろいろな形でお知恵を拝借し、ご指導いただければと願っている。
- 改めまして、毎回遅い時間にお集まりいただき、長い期間、多大なるご貢献をいただき、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。